

## 児童中期・後期の友だち集団関係性が 社会的スキルの発達に及ぼす効果 (2)

——性差の検討——

堂 野 恵 子

### The Effects of the Group-Friendship Relations on the Development of Social Skills in Fourth and Fifth Graders of Elementary School (2): Analysis from Sex Differences

Keiko DOHNO

**Key Words:** 社会的スキルの発達, 友だち集団関係性, Kiss-18 (児童版), 性差

人間関係の希薄化が指摘されて久しい現在, 教育の場では人格発達における社会化, 特に対人関係の発達・育成について以前にもまして強い関心もたれてきている(堂野, 2000)。こうした視点に立った発達・教育心理学的アプローチとして, 「社会的スキル (social skills) の発達」が注目されている(例えば, 堂野・光本・河内, 2006; 渡辺, 2007; 堂野・光本, 2009; 堂野, 2010)。社会的スキルは対人関係の形成や維持に関する基本的要因であり, 具体的には他者と適切に関わるために用いられる行動・技能であって, 我々が円滑な社会生活を送り適応を図る上で重要な機能を果たす(堂野, 2000)と捉えられている。相川(1996, 2000)は従来の諸研究を総括し, 「対人場面において, 個人が相手の反応を解釈し, それに応じて対人目標と対人反応を決定し, 感情を統制した上で対人反応を実行するまでの循環的過程」と定義している。

社会的スキルの発達研究のパラダイムには, 発達過程を「自己制御性」(柏木, 1986), 特に「自己主張的側面と自己抑制的側面のバランスのとれた発達」の視点から捉える筆者らの立場があり, これまで幼児期(河内, 2005a), 児童期(堂野ら, 2006), 青年期の中学生・高校生(光本・堂野・河内, 2006; 堂野ら, 2009; 堂野, 2010), 高齢期(光本・堂野, 2006)といった生涯発達の視点からの発達段階を追っての検討, また施設幼児(河内, 2005b)や施設児童(堂野・光本, 2006)についての検討も行なってきた。しかし社会的スキルの発達研究には, これと並んで, 社会的スキルをより「広範に」, 「包括的に」捉えようとする伝統的ともいえるパラダイムがある。「Kiss-18」(菊池, 1988)はその代表であり, 他の多様な人格尺度との相関研究からも妥当性は高い(菊池, 2007)とされている。前研究(堂野, 2010)は, 社会的スキルの発達を検討する上では, これまで筆者らが取り組んできた「自己制御性」の発達の視点からと共に, 「Kiss-18」を用いてより広範・包括的な「一般的」社会的スキルを検討すること, これもまた重要であるとの視点に立って行われたものである。

教育相談の場では, 不登校やいじめ等の背景について, 友だち関係を巡るトラブルや葛藤の存在, それも当事者間に見られる社会的スキルの発達の未熟さが指摘されることが多い(例えば,

酒井, 2007; 庄司, 2007; 堂野ら, 2009)。しかし, 相互関係性の視点からは, 友だち関係のあり方そのものが, 社会的スキルの発達に与える影響性も当然予想されるところである。ところで岡田(1993)は青年期の「友だちグループ内での関係性」のあり方, つまり「友だち集団関係性」について, ①「やさしさ志向」(気遣い)型——特定の友だちやグループのメンバーとの関係性を大切に, 友達に「気を遣って」関わることを特徴とする——, ②「対人退去」(ふれあい回避)型——友だち関係の深まりを避け, 互いに傷つかぬよう・領域を侵さないよう「距離を置いた関わり方」をするのを特徴とする——, ③「群れ志向」型——友だちといつも一緒にいることを好み, しかも「深刻さを回避」して「楽しさを求める」などを特徴とする——, の3類型を見出し, その測定のための質問紙を作成している(岡田, 1995)。前研究(堂野, 2010)では, この岡田(1993)の「青年期」の友だち集団関係性の3類型は, 児童期, 特に友人関係が子どもにとって重要な意味を持ち始めるギャング・エイジ開始期の「小学校中学年(4年生)から高学年(5年生)」にかけても成り立ちうるのかについて, またこの「友だち集団関係性」と上記 Kiss-18による「社会的スキルの発達」との関連について, それぞれ検討が行われた。

その結果, 学年別にみた友だち集団関係性の類型別出現率には有意差は見出されず, 4年生・5年生ともに, ①「やさしさ志向」型, ③「群れ志向」型, ①+③「やさしさ・群れ志向混合」型が他の型(②「対人退去」型, ①+②型, ②+③型, その他)に比べて多く, また②型は極めて少なかった。さらに, 友だち集団関係性と社会的スキルの発達との関連については, ギャング・エイジに入ったばかりの4年生で既に「かなり高い」社会的スキルの発達がみられ, これには児童本人の友だち集団関係性のあり方はあまり関係しないことが示された。一方5年生では, 影響性が見出され, ①型や③型という単独の型の友だち集団関係性でも「かなり高い」社会的スキルの発達が可能となるものの, 両者の特徴がミックスした①+③型の「やさしさ志向・群れ志向混合」型の関係性の場合, 最も社会的スキルが発達することが示された。

ところでこの前研究(堂野, 2010)では男子・女子コミにして分析され, 性差の検討は行われなかった。しかし, 小学生では心理的発達面において女子の方が男子より成熟が早いと指摘されており(例えば, 堂野, 1985), 女子の方が早く「青年期の友だち集団関係性への移行」が起こる可能性は十分考えられる。また菊池(1988)は Kiss-18 で測定される青年期の社会的スキルに性差は見られないとしているが, 庄司(1994)は, Kiss-18 タイプの小・中学生の社会的スキル測定尺度を開発する研究で, 男子と女子では対人関係の持ち方や内容に違いがあることを見出している。そこから庄司(2007)は, 両研究の差異はどこから生じるのかとの興味深い問題提起をしている。つまりこれは, 測定対象の違いからくる質問項目の内容といった「方法的」問題なのか, それとも, 性差の存在する小・中学生から, 近年指摘されることの多い青年後期の男性の対人行動の女性化(仲間との同調行動の増大・重視等)に伴う性差の減少といった, より「本質的な発達の」問題を含むものかとの疑問であり, 検討の必要性を指摘している。また渡辺(2007)も, 子どもたちの大半がすでに幼少期から同性集団に属して青年期に至るまで強い影響を受けることを考えると, 社会的スキルにはジェンダーによる違いの可能性があると指摘している。また中学生を対象にして「自己制御性」からみた社会的スキルの発達と適応との関係を検討した堂野ら(2009)においても, 男子と女子とでは明確な性差が見出されていた。こうした先行研究からは性差の検討の必要性が示唆される。そこで本研究では, 前研究(堂野, 2010)で行わなかった性差の検討を目的とした。

## 方 法

1. 調査対象：広島県内小学校の4年生108名（男子60名，女子48名），5年生115名。（男子58名，女子57名）
2. 調査時期：2008年6月
3. 調査内容：

- (1) 「社会的スキル尺度：Kiss-18（児童版）」

「青年期」の社会的スキルを広範・包括的に測定する「Kiss-18」（菊池，1988）の18の質問項目について「小学生」向けに一部修正し，小学校教員に子どもの「分かりやすさ」の視点からチェックしてもらった。各質問項目について，小学4年生と5年生に無記名式で，「いつもそうだ」から「いつもそうでない」までの5段階評定を求めた。なお，「Kiss-18」は本来青年用に開発されたものであることから，小学生や中学生を対象とした場合は，質問項目を一部修正して使用するという方法が従来よく用いられてきている（例えば，庄司，1994）。前研究でもこの方法を採用し，因子分析による尺度の妥当性の検討の結果，内的整合性を十分に満たすと判断された全18項目を，「Kiss-18（児童版）」として分析に用いた。Kiss-18（児童版）の質問項目，及び因子分析結果については，前研究（堂野，2010）のTable 2 参照のこと。個人別に求めた18項目の評定得点の合計を各自の社会的スキル得点（ $R$ ：18～90点）としたが，高得点ほど社会的スキルは高いことを意味した。

- (2) 「友人関係尺度（児童版）」

青年期の友だち集団関係性の特徴を，「気遣い」，「ふれあい回避」，「群れ」の3下位尺度から測定する「友人関係尺度」（岡田，1995）の17項目を「小学生」向けに一部修正し，小学校教員に「分かりやすさ」の視点からチェックしてもらった。岡田では「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4件法となっていたが，教員の助言に従い，小学生の分かりやすさの観点から，2件法（「はい」，「いいえ」）に変更し，無記名式で回答を求めた。質問項目の一部修正や回答方法の変更のため(1)と同様に因子分析が必要とも思われたが，修正の程度が少ないこと，また2件法によるデータでの因子分析の実施には問題もうかがえること，さらに，青年期の友だち集団関係性の類型はギャング・エイジに入る小学校中・高学年でも概ね成り立つのではとの仮定に立っての検討であることから，型判別を行う3下位尺度については因子分析による項目の削除は行わない方が適切と判断した。従って，岡田の青年版を参照して作成した全17項目を，「友人関係尺度（児童版）」として分析に用いた。質問項目については，前研究（堂野，2010）のTable 1 参照のこと。

## 結 果 と 考 察

1. 学年別・性別にみた友だち集団関係性の類型別出現率

各児童について，「友人関係尺度（児童版）」の質問項目（堂野，2010）の評定結果に基づいて「はい」を1点，「いいえ」を0点として得点化し，下位尺度別にその合計を求め，さらに下位尺度の項目数が異なることから平均得点を算出した。0点～1点に分布することから，中点の0.5点を基準として，以下の3つの条件に基づき，各自の友だち集団関係性の型を決定した〔<条件 i>第1位が0.6以上，かつ2位との差が0.2以上→1位が何かにより，①「やさしさ志向型」，②「ふれあい回避型」，③「群れ志向型」のいずれかの群とした。<条件 ii>第1位が0.6以上，

かつ1位と2位との差が0.1以下→3つの型のうちいずれか2つの「混合型」とした。(＜条件iii＞第1位は0.5以下, または第1位, 第2位, 第3位間の差が0.1以下→どの型にも属さない「その他」とした)。

Figure 1-1 と Figure 1-2 には, 学年別・性別にみた友だち集団関係性の類型別出現率が示されている。この中, 前研究で分析対象とした①型, ③型, ①+③混合型を本研究でも取り上げ, Excel 統計 (ver. 5) による  $\chi^2$  検定を行った。4年生では, 男子においては, ③群れ志向型の出現率が35.00%と最も高いものの, ①+③のやさしさ・群れ志向混合型 (20.00%), および①やさしさ志向型 (20.00%) との間には有意差は見出されなかった。しかし女子では, ①型 (50.00%) が最も多く, 次いで①+③型 (31.25%) であり, ③型 (6.26%) は最も少なく, ①型と③型の間には10%水準で有意傾向が見出された。5年生においても, 男子においては, ③型 (32.76%), ①+③型 (25.86%), ①型 (13.79%) の間には有意差が見出されなかった。しかし女子では, ①型が40.35%と最も多く, 次いで③型 (28.07%) であり, ①+③型 (14.04%) は最も少なく, ①型と①+③型の間には10%水準で有意傾向が見出された。また②ふれあい回避型は, 4年生では男子1名と女子1名, また5年生では男子4名と女子該当者無しとなっており, 両学年男女ともに出現率が極めて低かった。

このように, 小学校中学年 (4年生) から高学年 (5年生) にかけての友だち集団関係性には性差がみられた。つまり男子では, 両学年ともに, 特定の友だちやグループのメンバーとの関係性を大切に, 友だちに気を遣いながら関わることを特徴とする①「やさしさ志向」型, また, 友だちといつも一緒にいることを好み, しかも深刻さを回避して楽しさを求めるなどを特徴とする③「群

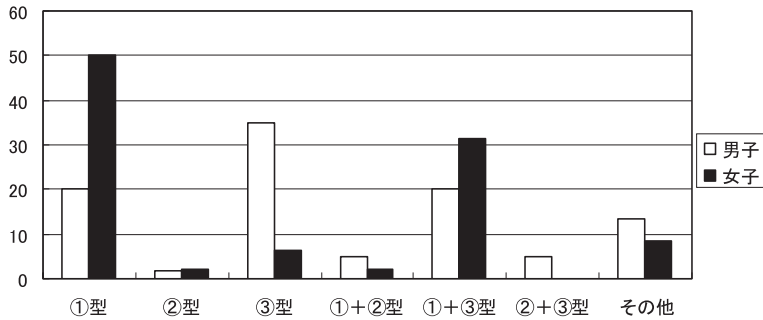


Figure 1-1 友だち集団関係性の類型別出現率 (4年生)

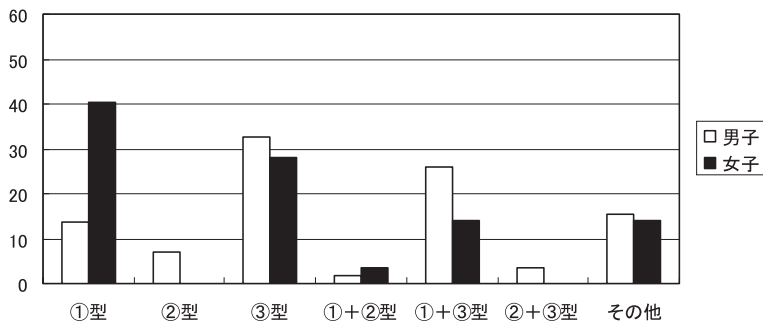


Figure 1-2 友だち集団関係性の類型別出現率 (5年生)

れ志向」型がそれぞれ多く、青年期（岡田，1993）の特徴に類似していた。しかし、この両者の特徴がミックスした①+③の「やさしさ志向・群れ志向混合」型も多いという、青年期とは違う特徴も示していた。一方女子では、両学年とも①型が5割～4割を占め最も多いが、③型については4年生では1割を切り最も少ないものの、5年生になると3割近くへと漸増傾向を示していた。また、男子・女子ともに、友だち関係の深まりを避けて互いに傷つかぬよう距離を置いた関わり方をする②「対人退去」（「ふれあい回避」）型が極めて少ない点は、青年期との違いであった。

2. 学年別・性別にみた友だち集団関係性と社会的スキルの発達との関連

小学校中学年から高学年にかけての友だち集団関係性と「Kiss-18」からみた社会的スキルの発達との関連を検討するために、学年別・性別に、友だち集団関係性の類型別の社会的スキル得点の平均を算出した。その際類型としては、「結果・考察」の2で出現率が低かった4つの型（Figure 1 参照）は除き、①「やさしさ志向型」、③「群れ志向型」、①+③の「やさしさ・群れ志向混合型」の3つの型のみを取り上げた。Figure 2 にこれを示す。なおSDは、4年生では、男子は①型10.79、③型10.27、①+③型10.56であり、女子は①型11.19、③型10.34、①+③型11.01であった。また5年生では、男子は①型6.16、③型9.83、①+③型9.43であり、女子は①型10.32、③型8.47、①+③型6.21であった。

Figure 2 について、学年別に、類型（①型、③型、①+③型）×性（男子、女子）の2要因分散分析を行った。4年生では、類型の主効果、性の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった。つまり、男子・女子を問わず、どの友だち集団関係性の類型においても社会的スキル得点の平均は70点前後であり、全員が4段階である場合の理論的得点の72点に極めて近いことが示された。つまり、ギャング・エイジに入ったばかりの4年生が既に「かなり高い」社会的スキルを発達させており、これには友だち集団関係性のあり方はあまり関係しないことが示されたといえる。

一方5年生では、性の主効果は有意ではなかったが、類型の主効果 ( $F(2,83) = 5.59, p < .01$ )、および交互作用 ( $F(2,83) = 4.00, p < .05$ ) のいずれも有意であった。類型についてライアン法による多重比較の結果、全体的傾向として、③「群れ志向型」に比べて①+③の「やさしさ・群れ志向混合型」の方が、有意に社会的スキルが高いことが見出された。また、交互作用の単純主効

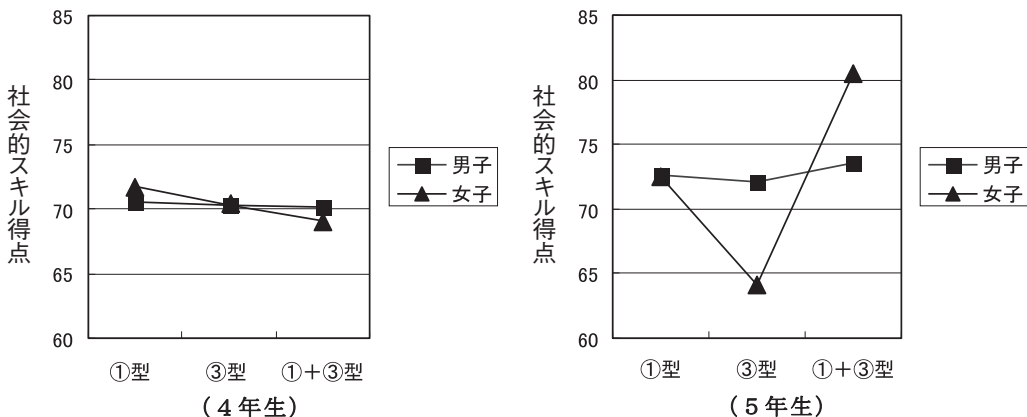


Figure 2 友だち集団関係性からみた社会的スキル

果の検定により、女子でのみ、③「群れ志向型」に比べて①「やさしさ志向型」、および①+③の「やさしさ・群れ志向混合型」がともに、0.5%水準で有意に社会的スキルが高いことが示された。また、③「群れ志向型」では女子の方が男子に比べて社会的スキルが5%水準で有意に低く、一方①+③の「やさしさ・群れ志向混合型」では男子より10%水準で有意に高い傾向が示された。

つまり5年生の男子では、社会的スキル得点は①型72.6、③型72.2、①+③型73.5と有意差がなく、どの友だち集団関係性の類型においても全員が4段階である場合の理論的得点の72点に極めて近く、「かなり高い」社会的スキルを発達させているといえる。一方女子では、社会的スキル得点は①型72.4、③型64.1、①+③型80.5であり、①型では全員が4段階である場合の理論的得点の72点に極めて近く、男子同様「かなり高い」社会的スキルを発達させているといえる。しかし、③型では72点を大きく下回り、3段階である場合の理論的得点の54点との中間あたりであり、一方①+③型では72点を大きく上回り、5段階である場合の理論的得点の90点との中間あたりとなっていた。つまり、5年生の女子では、社会的スキルの発達、本人の友だち集団関係性のあり方によりかなり大きな影響を受けていることが示されたといえよう。先述した4年生の結果とあわせて考えると、女子では、社会的スキルの発達に友だち集団関係性が与える影響は小学校中学年の4年生では低いものの、高学年に入る5年生の頃から強力なものへと変化していくといえよう。つまり、「やさしさ志向」の型では、4年生の頃と同様「かなり高い」社会的スキルの発達を維持するが、「群れ志向」の型では維持できず低目となる、しかし、両者の特徴がミックスしたような「やさしさ志向・群れ志向混合型」の関係性、つまり「特定の友だちやグループのメンバーとの関係性を大切にし、友達に気を遣いながら関わる」が、一方でそれが重すぎないように、場面によっては「友だちといつも一緒にいることを好み、深刻さを回避して楽しさを求めるなどの関わり」も併せて展開するようになり始めたとき、社会的スキルの発達が「かなり高い」女子に加えて「非常に高い」女子も出てくることが示されたといえよう。ただ①+③型の出現率が14.04%とまだ高くないことから、小学校高学年の女子においても、この「やさしさ志向・群れ志向混合」型の友だち集団関係性をバックとする社会的スキルの発達は、始まったばかりともいえよう。しかし、これにつづく青年前期の女子中学生はギャング・エイジまったただ中で、「友だちグループとしての関係性」のあり方が個人にとってより重要性を占めるようになる（例えば、堂野、1985；酒井、2007）ことから、「やさしさ志向・群れ志向混合」型の友だち集団関係性が与える影響性はさらに増大するのではなからうか。これに関して男子では、友だち集団関係性の類型別にみた社会的スキル得点は4年生と5年生でかなり類似しており、以上のような女子で示された発達の变化は見出されなかった。

以上、今回の研究では、小学校中・高学年の社会的スキルの発達に明瞭な性差が見出された。その背景としては、小学生では心理的発達面において女子の方が男子より成熟が早い（例えば、堂野、1985）ことから、女子の方が「青年期の友だち集団関係性への移行」が早く生じる可能性が考えらる。また「問題・目的」のところでもふれた、社会的スキルの発達における性差の存在を巡る菊池（1988）と、庄司（1994）や渡辺（2007）等との間の論争についても、本研究は後者の立場を補強する証拠の一つを提供したともいえよう。渡辺（2007）は、子どもたちの大半がすでに幼少期から同性集団に属して青年期に至るまで強い影響を受けることを考えると、同性の友だち関係と異性の友だち関係とは異なる社会的スキル、つまりジェンダーによる違いの可能性のあることを指摘し、性差の存在を「本質的な発達の問題」（庄司、1994）として捉えている。本研究もこれに近い捉え方といえよう。また、同じく青年期とはいえ、ギャング・エイジを抜け

だして「友だちグループとしての関係」のあり方よりも「個と個としての友だち関係」のあり方、いわば親友関係といった方が個人にとってより重要性をしめるようになる青年中期・後期の高校生・大学生では、友だち集団関係性と社会的スキルの発達との関係は、また違った様相を見せるのではないだろうか。またそこでは、本研究以上に性差が大きな検討課題として浮かびあがってくるのではなかろうか。「生涯発達の視点」(例えば Newman & Newman, 1975; Baltes, Reese & Lipsitt, 1980; Lerner & Bush-Rossangel, 1981; 東・柏木・高橋, 1993; 堂野, 1993; 鈴木, 2008) に立って、青年期以降の友人関係性と社会的スキルの発達との関係性について、性差も含めて検討することの必要性が示唆されるといえよう。今後の検討課題である。

#### (付記)

前論文(堂野, 2010)及び本論文は、筆者の指導の下に行われた平成20年度安田女子大学文学部心理学科卒業研究(古川, 2009)の調査資料の一部を用いて、社会的スキルの発達論や測定論からの新たな問題提起、及び因子分析や性差の検討も加えて研究を行ったものである。資料の利用に快く応じてくれた古川彩子さんに御礼申します。

#### 引用文献

- 相川 充・津村俊充(編)(1996). 社会的スキルと対人関係 対人行動学シリーズ 誠信書房.
- 相川 充(2000). 人づきあいの技術:社会的スキルの心理学 セレクション社会心理学20 サイエンス社.
- 東 洋・柏木恵子・高橋恵子(編・監訳)(1993). 生涯発達の心理学 新曜社.
- Baltes, P. B., Reese, H. & Lipsitt, L. (1980). Life-span developmental psychology. *Annual Review of Psychology*, 31, 65-110.
- 堂野恵子(1985). 青年期の特性と指導 堂野佐俊・堂野恵子(編)教育心理学要論 北大路書房 pp. 43-48.
- 堂野恵子(1993). 人間の学習と発達—生涯発達の基礎論的展開— 北大路書房.
- 堂野恵子(2000). 社会的発達と対人関係 堂野佐俊・堂野恵子 発達理解の心理学 おうふう pp. 189-227.
- 堂野恵子(2010). 児童中期・後期の友だち集団関係性が社会的スキルの発達に及ぼす効果 安田女子大学紀要, 38, 33-42.
- 堂野恵子・光本容子・河内 愛(2006). 自己制御性からみた社会的スキルの発達に関する研究(1)—小学生の分析— 児童教育研究, 15, 73-78.
- 堂野恵子・光本容子(2006). 自己制御性からみた社会的スキルの発達に関する研究(3)—施設児童と家庭児童の分析— 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 11, 1-10.
- 堂野恵子・光本容子(2009). 自己制御性からみた社会的スキルの発達に関する研究(4)—中学生における学校適応との関連— 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 14, 35-50.
- 古川彩子(2009). 小学生の社会的スキルの発達と友人関係および自尊感情との関連 平成20年度安田女子大学文学部心理学科卒業論文.
- 柏木恵子(1986). 自己制御(self-regulation)の発達 心理学評論, 29, 1, 3-24.
- 菊池章夫(1988). 思いやりを科学する 川島書店.
- 菊池章夫(2007). Kiss-18の構成 菊池章夫(編)Kiss-18ハンドブック 川島書店 pp. 23-36.
- 河内 愛(2005a). 幼児の自己制御性からみた社会的スキルの発達 児童教育研究, 14, 95-100.
- 河内 愛(2005b). 児童養護施設における幼児・児童の自己制御性からみた社会的スキルの発達—施設指導員の自己制御性との関連— 安田女子大学大学院修士論文.
- Lerner, R. M. & Bush-Rossangel, N. A. (1981). *Individuals as producers of their development*. New York: Academic Press. 上田礼子(訳)(1990). 生涯発達学 岩崎学術出版.
- 松尾直博(2004). 社会性の発達 糸井尚子・渡辺千歳(編)発達心理学エッセード pp. 182-195.
- 光本容子・堂野恵子・河内 愛(2006). 自己制御性からみた社会的スキルの発達に関する研究(2)—中学・高校生の分析— 児童教育研究, 15, 79-83.
- 光本容子・堂野恵子(2006). 施設高齢者における主観的幸福感の研究(5)—主観的幸福感と自己制御性

- 自己主張と自己抑制—からみた社会的スキルとの関連— 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 12, 25-34.
- Newman, B. M. & Newman, P. R. (1975). *Development through life: A psychological approach*. 福富 護・伊藤 恭子 (訳) (1990). 生涯発達心理学 川島書店.
- 岡田 努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 酒井 厚 (2007). 仲間関係と家族 酒井 朗・青木紀久代・菅原ますみ (編) (1993). お茶の水女子大学 21世紀 COE プログラム 誕生から死までの人間発達科学 3, 子どもの発達危機の理解と支援—漂流する子ども 金子書房.
- 庄司一子 (1994). 子どもの社会的スキル 菊池章夫・堀毛一也 (編著) 社会的スキルの心理学—100のリストとその理論 川島書店 pp. 201-218.
- 庄司一子 (2007). 対人関係の問題と子どもへの援助 菊池章夫 (編) Kiss-18 ハンドブック 川島書店 pp. 180-187.
- 鈴木 忠 (2008). 生涯発達のダイナミクス—知の多様性 生き方の可塑性—東京大学出版会.
- 渡辺弥生 (2007). 発達・教育分野での「社会的スキル」の課題と展望 菊池章夫 (編) Kiss-18 ハンドブック 川島書店 pp. 196-204.

### Summary

This article focused on the effects of the group-friendship relations upon the development of social skills in fourth and fifth graders of elementary school on the view of the analysis from sex differences.

Fourth graders (60 boys and 48 girls) and fifth graders (58 boys and 57 girls) participated the questionnaire asking their group-friendship relations, which was revised partly from adolescent version (Okada, 1995). They also participated 'Kiss-18 (child version)', which was partly revised from adolescent version (Kikuchi, 1995).

The main findings were as follows.

(1) Boys in both graders showed no significant differences for occurrence rates of three group-friendship styles. Girls in fourth graders, on the other hand, showed significant differences, namely style ① ('gentle and care-oriented style') was the highest and style ③ ('flock together-oriented style') was the lowest. Girls in fifth graders showed also significant differences, namely style ① was the highest and mixed style ①+③ was the lowest.

(2) The two factorial analysis of variance (group-friendship style × sex) of the social skill scores in fourth graders showed no significant main effect of group-friendship style, no significant main effect of sex and no interaction effect. But the two factorial analysis of variance in fifth graders showed significant main effect of group-friendship style, no significant main effect of sex and significant interaction effect. Subordinate analysis of group-friendship style showed that mixed style ①+③ achieved significantly higher social skill scores than style ③. Subordinate analysis of interaction effect also showed that only in girls both style ① and mixed style ①+③ achieved significantly higher social skill than style ③.

(3) So only in girls, the effects of the group-friendship relations upon the development of social skills from middle graders to senior graders of elementary school was clarified, then the expected existence of the sex differences between boys and girls was confirmed.